

## 中国留学生が留学先で経験する友人関係と生活の質に関する研究

北海道大学大学院 環境科学院  
環境起学専攻 実践環境科学コース  
侯子涵

国際社会にとって、国同士の関係だけでなく、人同士の関係が重要であることは言うまでもない。その中で、留学生は、世界中の人々と交流し、協働する機会を通じて、人と人を繋ぐ大きな役割を果たしており、文化間交流に関する文献の中で最も調査されたグループの一つである(Ward,Bochner,& Furnham,2001)。留学体験をより充実させるために、先行研究で注目しているのは、留学先で形成される友人関係と、留學生活の質の2つである(Sam, 2001)。

先行研究の多くは、母国の家族と友人と話すためには、高額料金の国際電話しかなかった時代に行われている。しかし、この10年間で、スマートフォンとSNSの普及し、母国の家族と友人と話すことが出来るようになり、留学の意義も変わってきている可能性がある。先行研究で得られた知見も、これに応じて修正していかなければならない。研究においても、これまでは、特定の国・特定の大学を対象にして調査されてきたが、世界各地で留学している留学生向けのオンライン留学生フォーラム(例えば、2020s 艱苦留学組)が生まれ、世界中の留学生を対象とした調査が出来る可能性が生まれた。例えば、Neri and Ville(2008)やHendrickson et al.(2011)は、ひとつの大学の留学生を対象とした調査を行っているが、現在の知見にするためには、母国にいる友人も対象とする必要とともに、対象を世界中の留学生に拡大できる。

本研究では、世界各地で留学している中国留学生の友人関係(母国にいる友人との連絡を含む)と留學生活の質の関連性や、それらに影響を与える要因や地域性を見つけるために、Hendrickson et al.(2011)を参考にし、世界の海外留学生の25%を占める中国留学生(WangHuiyao & Miaolu,2016)を対象とアンケートと半構造化インタビューをそれぞれ2回実施した。アンケートは上記のフォーラムで呼びかけ2021年1月~2021年7月実施し、インタビューは「追加調査に参加してもよい」と答えたアンケート回答者に2021年5月~2021年10月実施した。アンケート調査では、中国28の省/自治区/直轄市出身、世界4州20カ国に留学している254人のデータを得た。また、インタビューではアンケートの回答を確認し、回答した背景を探るために地域性を配慮して26人のデータを得た。

留学先の中国人友人と外国人友人を足した平均人数は5.6人であり、本研究と同様な友人の数を数えたNeri and Ville (2008)の結果(平均数6人)と一致している。なお、SNSの普及や新型コロナウイルス感染症の世界的流行でも、留学先友人数はほぼ変わらないのは興味深い。友人関係の中、留学先外国友人の存在が小さく(平均人数は1.9人(全友人の17%))、中国人同士が主となる(留学先中国友人数3.7人(同42%)、母国在住友人数3.6人(同41%))である。北米在住の留学生の母国在住友人数はヨーロッパ、アジア在住の留学生より1人低い。

本研究でも、先行研究でよく調査された異文化への適応については、留学先外国友人の比率と正の相関があり、留学先中国友人と負の相関があることが示され、先行研究の結論(Ward & Kennedy, 1993b, Maundeni, 2001)と調和的である。中国留学生が新しく形成される友人関係「留学先外国友人・留学先中国友人・母国在住の友人」の3者に対する話題は、前者2つは主に学業と生活の話であり、後者は生活の話が中心だった。留學生活の質として多かったキーワードは「孤独」、「充実」、「異文化への適応が難しいと思う」である。北米在住の留学生はヨーロッパにいる留学生より孤独感を感じている。留学生毎の母国在住友人数は、異文化への適応や語学力と負の相関があり、ホームシックと正の相関がある。母国在住の友人は、大きな存在であり、気持ちに対する良い影響(気持ち良くなる…)も悪い影響(焦りを感じる…)を与えることが分かった。

本研究では、SNSが盛んになった影響として、これまであまり調査されていなかった母国在住の友人についても、比率と異文化への適応と負の相関があることが証明され、留学先中国友人と同じ役割があることを明らかにした。また、世界20カ国にいる中国留学生を対象に調査を行った結果、友人総数、幸福感や異文化への適応などの項目については、各国にいる中国留学生の回答に有意な差はない一方、母国在住友人数、孤独感などの項目には地域性があることも明らかになった。全体の傾向を議論するには十分なサンプル数だったが、地域性を議論するには、サンプル数を増やすことが必要である。また、先行研究でも留学生の多くは中国留学生だったため、本研究では中国留学生に注目した。そのため、他の国出身の留学生に関する情報は得られていない。